

はしの なし

第十二稿 昇龍橋ものがたり

「はしのはなし」では、皆さんに横浜の橋の歴史や小話を、定期的にご紹介していきます。第12回目は、昇龍橋について。

昇龍橋は、「ヨコハマの橋」Instagramフォトコンテスト2021にて【ヨコハマの橋・最優秀賞】を受賞した作品の題材ともなり、また現在放映しているNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」でも話題の鎌倉幕府にも縁のある橋です。そんな昇龍橋の誕生から、現在までの小話をしていきましょう。

1 昇龍橋はどこにあるのか？

昇龍橋は、右図のとおり栄区を東西に流れている柏尾川支川の“いたち川”の源流部に架かる橋です。

上郷の村社「白山神社」の旧神殿の参道にかかる橋で、主要地方道原宿六浦線の脇道にある自然豊かな場所に佇んでいます。

関東以北で現存する数少ない石橋であり、現在市内で橋梁課が管理する橋としては唯一の石橋です。

昇龍橋は後に説明します歴史的な価値等が認められ、横浜市認定歴史的建造物に認定されています。

a



b



昇龍橋を下流から望む、石橋と紅葉が趣深い



【諸元】

- ・名称：昇龍橋（しょうりゅうはし）
- ・所在地：栄区長倉町1-29番地先
- ・橋長：5.5m
- ・幅員：1.5m
- ・竣工：明治中頃～大正4年(1915)
- ・橋種：石造りアーチ橋

2 昇龍橋はいつから架かっていたのか。

時は平安時代末期、鍛冶ヶ谷に創建された白山神社は、鎌倉の良(北東・鬼門)に位置することから、鎌倉幕府の「守良の神」として源頼朝も深く崇敬していた神社でした。この由緒ある白山神社は、正中元年頃(1324)に光明ヶ谷神戸に遷宮し、昇龍橋はそこへ向かう参道橋として架けられた木橋が始まりだと言われています。(※白山神社は昭和51年(1976)に東上郷町へ遷宮し、現在もその土地にあります。)

その後、明治初期頃に村社に列格した白山神社へ向かう参道橋として、架替の際には立派な石造のアーチ橋へと生まれ変わりました。これ以降、昇龍橋は姿を変えておらず、当時の姿を留め、同じ場所に架けられている橋としては、市内に現存する中で最も古い橋でもあります。

c



昇龍橋を左岸下流側から望む。

d



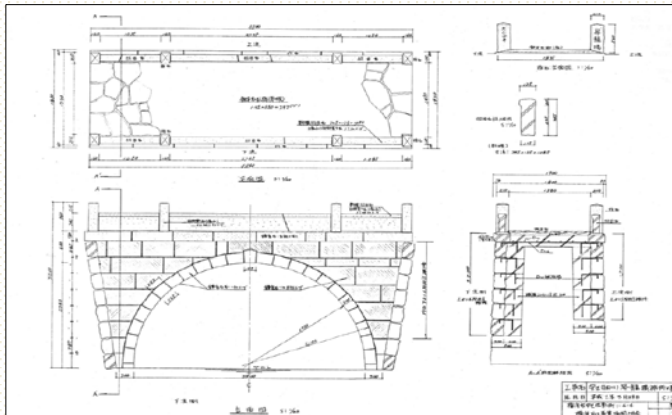
昇龍橋を左岸側へ渡り、階段を上がると、鳥居の一部や基礎が残されており、かつてこの場所に立派な石造の鳥居があったことが伺える。

その石橋となったのは、いつなのかと言うと、実は正確なところは不明です。この昇龍橋の親柱には大正4年(1915)と刻まれおり、通常であれば、これが竣工年と考えられます。

しかし、昇龍橋においては、橋本体は鎌倉市今泉で産出される鎌倉石(または今泉石)で作られているのに対し、親柱を含む欄干は御影石で作られていることから竣工年が異なると推測されます。

記録によると、大正3年に大正天皇の即位の礼が行われたため、これを記念して翌年には村社である白山神社には石造の鳥居と、その参道にある昇龍橋には欄干が設けられたと考えられます。橋の欄干は、現在でこそ、転落防止を主な目的としていますが、かつては装飾のためという意味合いも強くありました。

e



「昇龍橋」の橋梁台帳
平成2年の補修工事時に作成した図面である。
橋本体と欄干の材料が異なることがわかる。

f



右岸上流側の親柱 右岸下流側の親柱
上流側には「昇龍橋」と刻まれており、
下流側のは文字がかすれ、ほとんど読めないが「大正四年」と刻まれている。

では、橋本体はと言うと、明治12年頃に編纂された「皇国地誌」の記録では、昇龍橋の名は無いが、すぐ下流に経堂橋の名が記載されており、これが木橋から石橋へ架け替えられたのが明治中期頃と推測され、現在は供用されていない経堂橋も昇龍橋と似た石造アーチ橋であったため、昇龍橋も現在の石橋となったのは同時期の明治中期頃であると考えられています。

引用 c,d,f: 橋梁課撮影 e: 橋梁課所蔵

参考文献1: 小野寺篤 [著], 「よこはまの橋・人・風土」, 昭和58年出版

参考文献2: 間宮士信 等編 [著], 「新編相模国風土記稿」, 明治17-21出版

参考文献3: 神奈川県神社庁 [編], 「神奈川県神社誌」, 昭和56年出版

3 他にはない趣を感じさせる意匠

昇龍橋のような石造のアーチ橋の歴史は、日本においては江戸時代以降のもので、それ以前は基本的には木橋でした。石造アーチ橋は海外からの技術の伝搬が由来してか、そのほとんどが九州・沖縄地区に存在し、関東以北では非常に数が少ないです。

この昇龍橋は、それらの九州・沖縄地区のものとも異なる独自の意匠が施されており、それらがこの橋の唯一性を生み出しています。

参道橋ということもあり、趣のある意匠や緻密な意匠が各部材に施されており、それが今もこの地を訪れる人々が足を止めたくなる原風景的景観に寄与しています。

g



河川形状に沿ったアーチ構造となっており、いたち川源流部の景観との親和性が高い。

h



輪石の幅と厚さの比がおおよそ3:2となっており、九州・沖縄地区のものとは比べ薄い構造で、緻密なデザインとなっている。

i



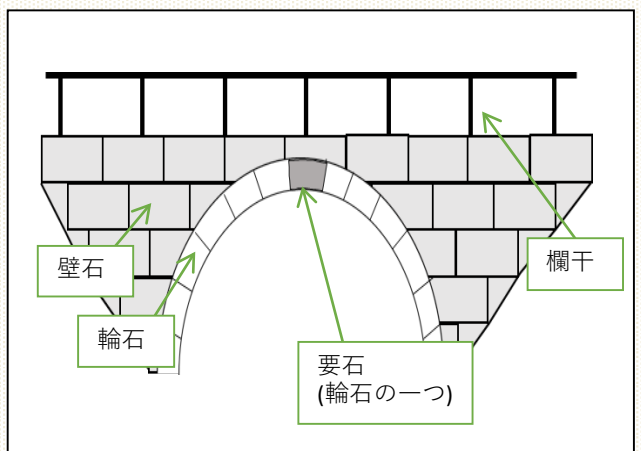
要石が五角形をしており、石橋では非常に珍しい。また要石上部は三角に掘られ、要石と一体となるような意匠で、施工の緻密さが伺える。

j



路面は平成2年の補修工事にて、現在の模様となっている。全体のバランスを崩さないように平石での化粧となっている。

k



石造アーチ橋の各部材の名称

4 魅力あるいたち川の橋

いたち川には、最古の橋である「昇龍橋」のほか、市内で唯一の木橋である「みなもと二の橋」、「みなもと三の橋」や区のシンボルであるいたちがデザインされた「小いたち橋」、「大いたち橋」などその他にも多彩な橋が架かっています。

また、源流部には前記した「みなもと二の橋」、「みなもと三の橋」のほかにも「源氏橋」やかつて「弁慶橋」や「義経橋」と呼ばれていた橋もあり、鎌倉幕府と直接の関係は見つかりませんが、鎌倉時代を彷彿とさせる名称となっています。

1



いたち川の橋梁位置略図

m



みなもと二の橋を右岸側から望む。
市内に2橋しかない木橋の1つである。

n



扇橋を左岸下流側から望む。
自然の中で一際目を引くデザインを有している。

o



源氏橋を左岸側から望む。
これも見た目には木橋に見えるが、木製なのは路面や欄干部分で、橋の主部材である桁は鋼で出来ているため、木橋扱いではない。

p



大いたち橋、小いたち橋を左岸下流から望む。
橋の親柱は、区のシンボルである“いたち”がモチーフとなっている。
※詳細は、第七稿 魅力ある親柱特集(後編)